

今日のキーワード 「夏のボーナス」、3年連続の増加（日本）

主要企業の「夏のボーナス」の大まかな支給状況については、一般財団法人「労務行政研究所」が毎年5月中旬頃に発表する「東証第1部上場企業の夏季賞与・一時金（ボーナス）の妥結水準調査」で把握できます。今年は企業収益の好調さを背景に、「夏のボーナス」は3年連続の増加となりそうです。ただし、伸び率は2015年の3.0%増加からは鈍化する見込みです。

ポイント1 「夏のボーナス」は前年比1.7%増加へ

リーマンショック以前の水準に近づくが、伸び率は鈍化へ

- 「労務行政研究所」が11日に発表した東証一部上場企業126社の「夏のボーナス」は、昨年夏と比べて平均で1.7%増加の73万4,090円となる見込みです。
- 増加は3年連続となり、リーマンショック直前に支給された2008年夏の水準（平均金額は74万3,380円）に近づいてきました。ちなみにリーマンショック後最低だった2009年夏の水準（同64万8,149円）からは、13.3%増加する見込みです。ただし対前年同期比伸び率では、2014年の5.7%増、2015年の3.0%から鈍化する見通しです。

ポイント2 業種別で明暗分かれる

建設・電力好調、鉄鋼・非鉄は減少

- 業種別に見ると、製造業は昨年夏に比べ1.0%増、非製造業は3.6%増と、非製造業の伸びが高くなる見込みです。製造業に関しては、昨年はほぼすべての業種で増加となりましたが、今年は市況の下落により収益が落ち込んだ、鉄鋼、非鉄などの業種ではマイナスとなる見通しです。
- 逆に好調なのは、建設、電力などで、いずれも前年比で10%強の増加となる見込みです。この他に好調な業種としては、水産・食品、化学、ガラス・土石などがあげられます。



今後の展開 今後のボーナス増加は不透明

■上場企業の会社側業績予想は減益見通し
ボーナスの増加は、今後の消費の回復に寄与する見込みですが、今後の見通しについては不透明要素が出てきています。3月決算の発表が先週までにほぼ出揃いましたが、2016年度の企業側の業績予想は、経常利益で3%程度の減益見通しとなった模様です。円高の進行が主な要因です。

■増加トレンドに変調の可能性も減少は小幅か
企業側の業績予想は、当初は慎重なものが多く、今後上方修正される可能性は残されています。ボーナスは前年の業績を基に支払われます。円高進行が止まれば、世界経済の拡大を背景に企業業績の回復を反映したボーナスの支給が見込まれ、個人消費が大きく落ち込む懸念は小さいと見られます。

ここも
チェック!

2016年 5月10日 日本の毎月勤労統計（2016年3月）実質賃金が5年半ぶりの高い伸び
2016年 5月 6日 「季節予報」によれば今年は暑い夏に（日本）

■当資料は、情報提供を目的として、三井住友アセットマネジメントが作成したものです。特定の投資信託、生命保険、株式、債券等の売買を推奨・勧誘するものではありません。■当資料に基づいて取られた投資行動の結果については、当社は責任を負いません。■当資料の内容は作成基準日現在のものであり、将来予告なく変更されることがあります。■当資料に市場環境等についてのデータ・分析等が含まれる場合、それらは過去の実績及び将来の予想であり、今後の市場環境等を保証するものではありません。■当資料は当社が信頼性が高いと判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。■当資料にインデックス・統計資料等が記載される場合、それらの知的所有権その他の一切の権利は、その発行者および許諾者に帰属します。■当資料に掲載されている写真がある場合、写真はイメージであり、本文とは関係ない場合があります。